

会報 しおかぜ No.230 別冊

＜千葉県自然観察指導員協議会(自然観察ちば)創立 40 周年記念特集＞

2024 年 9 月 1 日発行

40 年を振り返って

代表 伊藤道男（千葉市）

千葉県自然観察指導員協議会(自然観察ちば)は 1983 年 9 月に発足し、昨年創立 40 周年を迎えました。会員間の協力・連携を深め、資質の向上を図ることを目的とした活動が続け、当初の会員数は約 50 名でしたが、現在は 220 名余を数えるに至っています。

この間、現在も元気で活躍されている創立メンバーの高野さん(市川市)、浅間さん(我孫子市)はじめ、多くの会員に支えられてきました。初期のメンバーは学校教員の方が多かったようですが、創立直後から都市部の身近な自然から房総半島の奥地まで様々なテーマで自然観察会が開かれています。

やがて、1992 年からは昭和の森の、2006 年からは大草谷津田いきものの里の定例観察会が行政と協働した形で始まり、現在まで継続しています。そして 2000 年には東葛しぜん観察会が発足し、こちらは行政に頼ることなく、東葛地域の歴史や文化と一体となった多様な自然を発掘してきました。

2002 年には小学校の自然学習を支援するSSN活動が河添さん(千葉市)の提唱で始まり、多くの学校で実践が積み上げられていきました。この取り組みは全国的な注目を浴び、2014 年には日本自然保護協会(NACS-J)の沼田真賞を受賞しました。

また、NACS-J の自然観察指導員講習会もほぼ隔年で県内実施され、受講生の 50%前後が自然観察ちばに入会して、県内各地で自然観察会開催の原動力となってきました。

この間、昭和の森の開発問題や東日本大震災にともなう放射能問題、そして記憶に新しい新型コロナウイルス感染症など様々な問題がありましたが、それらに惑わされることなく、地道に自然観察会活動を継続してきたことは、当会の矜持を示すものであり、誇りとするところです。

(次ページにつづく)

目次	40年を振り返って	(伊藤道男)	1
	自然観察は未来のバトンタッチの仕事	(浅間茂)	2
	SSN 活動25年の歩み	(河添寿子)	3
	昭和の森は、子育てと自然観察のフィールド	(佐野由輝)	3
	子どもたちの将来に願いを託して	(川瀬美幸)	4
	千葉県自然観察指導員協議会(自然観察ちば)創立40周年の主な出来事		5
	編集後記		12

ここまでの振り返り内容は、会報誌しおかぜの記事に基づいています。会の歴史を振り返ると必要なことはすべてしおかぜに記載されていると改めて実感した次第です。しおかぜの編集、発行に汗をかいた歴代の編集委員にも改めて感謝を申し上げます。

少し個人的な思い出を書かせてもらおうと、私が指導員になったのは 1988 年(昭和 63 年)ですが、その直後から田中さん(現在は長野県に移住)に誘われ、稲毛の喫茶店で開催されていた月例会に顔を出していました。当時の月例会は集まった会員が県内各地の自然について情報交換するサロンのような楽しい内容でしたが、何が決まったかはっきりしない不思議な会でした。

やがて行政、企業、団体等と連携してさまざまな観察会を担うようになり、現在のような運営体制に移行してきましたが、現在の形に収まるまで幾多の先輩方の努力が必要でした。

最近、環境省の推進する「自然共生サイト」認定、千葉県知事が推進する「自然環境保育」など、新たな課題への参加、協力を求められることが増えてきました。これらの動きに対しても会としてできる範囲の協力を惜しまない対応をできればと考えていますので、会員の皆さまの改めてのご理解と協力をお願いします。

自然観察は未来のバトンタッチの仕事

浅間 茂（我孫子市）

当年 74 歳、千葉県自然観察指導員協議会は 40 周年記念ですから、私は当時 34 歳あつという間ですね。作ることは簡単でも、続けることは大変なことです。40 周年おめでとうございます。子供たちの自然観察活動は、未来を生きるための大きな土台になると思います。私の自然に対する大きな考え方の土台は、自然観察指導員になった時につくられました。講師として参加された青柳昌宏氏、金田平氏、柴田敏隆氏の自然に対する情熱に触れたことは、大きな力になりました。何事も情熱あつてこそ伝わるのですね。

しかし、無理をせずに何事もできる範囲で楽しみながらやるのが長続きする秘訣です。今できることは、子供たちに大切な生きる術をバトンタッチすることです。私たちができるのは自然観察を通してバトンタッチすることです。楽しみながら、子供たちに未来のバトンタッチができる自然観察指導員はすばらしいですね、観察会の初めは、まず驚かすことからです。観察会では、いつも竹背負い籠と杖を持ち歩きます。杖は鳥が鳴けば、その方向を示し、高い所の葉は杖を逆にして引き寄せます。カエルの観察会ではカエルの帽子をかぶり、鳴き声を出すオモチャのカエルを持って行きます。クモの観察会では大きなクモのぬいぐるみ持参です。子供たちの輝く目を見るのは、嬉しいですね。それが自然観察指導員の仕事です。

千葉県の自然観察指導員の要が、千葉県自然観察指導員協議会です。



コガネグモ



カジカガエル

SSN活動 25 年の歩み

河添 寿子（千葉市）

多くの子供たちに自然体験をしてもらおうと有志で「小学校自然観察支援ネットワーク(SSN)」を立ち上げました(1999 年)。学校にチームを組んで出向き、少人数の子供たちにきめ細かく対応できる観察を目指しました。

○県内各地の 89 名の有志が集まり、私たちにできること、めざすことを話しあいました。2000 年から活動をはじめ、観察フィールドは授業の後で先生と児童が継続観察できるよう、校庭や近隣の公園、などにしました。

○活動をやり易くするため、学校との打ち合わせなどが手拔かりなくできるようフォーマットを準備して活用することにしました。

○学校でのより良い指導のため、生活科、総合的な学習などの具体的な内容を確認し、授業を先取りしないプログラム作りなどや、各学校のフィールドを使った実施研修(勉強会)を行いました。(昨年までに 74 回)

その後メンバーも増え、地域の協力者、保護者の協力も増えて、中学校、保育園(所)の支援、教職員の研修の講師など活動の幅を広げ、2011 年には活動開始以来のべ 45,990 名の参加人数を数えました。

○活動、勉強会などの成果をまとめ、「指導員のしおりとアクティビティ集」を作り、SSN 以外の観察会でも活用していただけるよう、指導員協議会の会員全員に配布しました。

2004 年「自然保護」3 月号に 2 ページにわたり、SSN 活動の内容が掲載され、埼玉県の手引協議会からの依頼で SSN 活動について紹介したりしました。少しずつ他県の方たちにも知られるようになり、2013 年にこれまでの活動が認められて、沼田眞賞の受賞が決まりました。2014 年第 13 回沼田眞賞授賞式・記念講演会において「身近な自然観察を学校教育の場で支援」という題で県内各地の中心的メンバーがそれぞれの活動内容を紹介しました。

その後、東京電力原発事故の放射能汚染による心配で県北部の小学校の活動が制限されたり、新型コロナウイルス感染症予防のための工夫をしたりしながらも SSN 活動は続いています。2023 年は実施 54 回、指導員数延べ 216 名、協力者数延べ 107 名、参加者数 3,037 名です。



昭和の森は、子育てと自然観察のフィールド

佐野 由輝（大網白里市）

私が、自然観察指導員になり、自然観察ちばに入会したのは 1999 年。右も左も分からない私でしたが、諸先輩方に、暖かく見守られ、育てられました。

さて、私には、2 人の子どもがいますが、長男が 2000 年生まれで、長女が 2004 年生まれ。当時、私は、昭和の森観察会を担当していたので、子どもたちが赤ちゃんの頃から、昭和の森に連れてきて、自然観察会に参加していました。長女をだっこして、長男の手をつなぎながら、ガイドすることもたびたびあり、時には、おむつ交換のために自然観察会が中断することもありました。こんな感じの自然観察会だったのですが、中には、私の子どもに会うことを楽しみにする常

連さんもいて、たまに私 1 人だったときは、「今日は、お子さんいないんですか」と寂しそうな顔をしていました。昭和の森の中ですくすく成長した 2 人は、今では、長男は社会人、長女は大学生です。昭和の森は、自然観察会としてはもちろんのこと、子育てのフィールドとしても最高です



ね。

期せずして、自然観察ちばでも、子ども向けの自然観察会を構想するようになり、私と同様、子育て真っ最中だった仲間とチームを組んで、2004 年から、昭和の森こども自然観察会をスタートしました。今も、親子田んぼ教室として継続しています。

そして今、日本自然保護協会では、「すべてのこどもに自然を！プロジェクト」に取り組んでいます。いまや、子ども時代の自然体験の重要性は、疑いないものになっています。これから、子どもたちの笑顔があふれる自然観察会を続けていきたいです。

子どもたちの将来に願いを託して

川瀬 美幸（柏市）

私が自然観察指導員講習を受講したのは、2010 年 6 月、息子が 4 歳になった年だった。当時の研修会は二泊三日で、小さい子を留守番させてまで「今、受講しなければ！」という熱い気持ちになったのは、生まれてからずっと住んでいた地元の風景が変わりつつある恐怖からだったのかと、今になって思うことがある。

講習会受講の自己紹介カードには、「子どもたちを虫嫌いにさせない、泥んこ嫌いにさせない、生きものや自然を意識して暮らしたい、親である私たち世代の意識を変えたい」と書いていた。その思いは今も変わらず持ち続けている。縁があり、私と息子の通った小学校で 9 年前から身近な自然をテーマにした授業にかかわっている。子どもたちが虫や鳥、植物などを観察し、自分たちのテーマを掘り下げて探究していく内容で、このような体験が将来子どもたちの心の中で、地域に対する愛着や自然を大切にする気持ちに繋がっていくことを願っている。



数年前に自然観察ちばの小学校自然観察支援ネットワーク（SSN）の役員を引継ぎ、県内各地で活動している会員の報告書を受け取り整理しているが、それぞれの地域で工夫を凝らした報告書を読むたびに SSN 担当者の熱心さを感じる。

各地域で活躍されている担当者は経験豊富な先輩方が多いが、常に新しい知識を学び、子どもたちにいつも真剣に向きあう方たち。身近にそんな方々がいてとても心強い。この思いに共感した新しい仲間も少しずつ増えていてありがたいことだ。

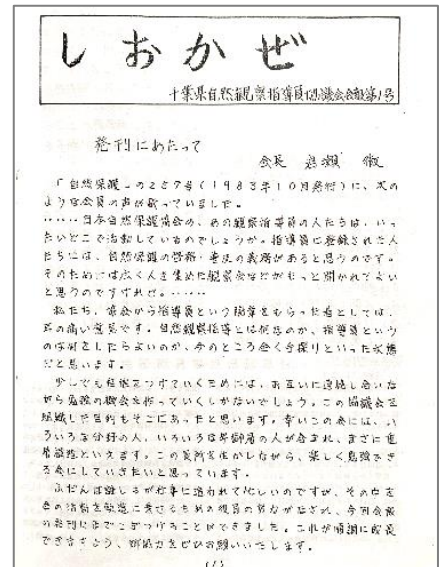
開発などで消失していく地域の自然もあるが、私たちが次世代に伝えることで何らかが変わる将来もあるかもしれない。そんな思いで活動をしている。

千葉県自然観察指導員協議会(自然観察ちば)創立40周年の主な出来事

<1983 年> 協議会が創立される

9 月 4 日 結成総会(習志野市菊田公民館)開催、29 名が出席。千葉県自然観察指導員協議会が創立される。会長に岩瀬徹氏。青柳昌宏講師の講演「指導員の理想像」を同時開催。

12 月 25 日 機関誌「しおかぜ」第1号の発行(手書きです)。
会員数は 46 名(12 月 24 日時点)。現在も会員の浅間茂氏が第1号に「手賀沼の自然 カモの観察」を寄稿。



<1984 年> 研修会、自然観察会が始まる

2 月 総会(行徳野鳥観察舎)にあわせて、初めての研修会「市街地の鳥が増えてきた」を実施。

8 月 初めての自然観察会を養老溪谷(「川のはたらきと人間生活」)で実施。田辺盛光、永田章、亀井尊、高野史郎の各氏が講師。参加者は 45 名(子どもが 6 割)。

12 月 会報しおかぜの編集を第4号から高野史郎氏が担当。

<1985 年> 千葉市で観察会が開始される

4 月 「野生ザルを追って」をテーマに、初めての宿泊ベースの研修会を実施(君津市久留里〜高宕山)。

地域観察会を県内で 3 回実施することとなり、初めての地域観察会を千葉市(泉自然公園)で実施(7 月)。他に、手賀沼(11 月)で実施。

8 月 日本自然保護協会の自然観察指導員講習会が千葉県大房岬で開催される(2 泊 3 日、千葉県では 2 回目)。協議会から岩瀬徹、真田三郎、浅間茂の各氏が講師に。以後、千葉県開催地を中心に、協議会から継続的に自然観察指導員講習会に講師、スタッフとして参加。

11 月 勝浦で新指導員歓迎研修会を一泊で実施。

<1986 年> 千葉県内で地区観察会を開始

地区観察会(地域観察会から地区観察会に名称変更)として、千葉市で自然観察会を 3 回実施(6 月稲毛海浜公園、9 月園生の森、11 月柏井市民の森)。館山・沖ノ島でも観察会を実施(8 月)。

12 月 初めて昭和の森で研修会を実施(1 泊 2 日)。昭和の森ユースホステルに宿泊。

…果実酒づくり、果実酒の飲み比べといったプログラムも。良き時代？

＜1989 年＞ 千葉県立中央博物館がオープンする

- 3 月 2 月にオープンしたばかりの千葉県立中央博物館で総会を開催。
・・・付属の生態園の看板を沼田真先生が揮毫。あまりに達筆で、「生きた熊のいる園」と勘違いする人もいたとか。
- 4 月 千葉地区自然観察会として昭和の森で観察会を実施。テーマは「雑木林で春をさがす 道端の草をつんで食べてみよう」(担当: 亀井尊氏ほか)

＜1992 年＞ 昭和の森観察会の連続開催が始まる

- 1 月 昭和の森自然観察会の連続開催を始める。第1回は、「冬越しのスタイル」。しおかぜに伊藤道男氏(現代表)が観察会の模様を報告。

＜1993 年＞

- 2 月 総会で、会長が岩瀬徹氏から小牧利治氏へ。

＜1994 年＞

- 8 月 しおかぜが 50 号となる。
・・・当時は、それぞれの問題意識や思いなどが会報に多く寄せられていた。例えば、市川清忠氏(副会長、後、代表)の「樅の木は残った—ある自然保護運動の記録」(第 51 号 1994 年 10 月)には、近隣に持ち上がった再開発事業の計画に歯止めをかける粘り強い取り組みとその成果が紹介されている。曰く、「、、ともあれ、“樅の木”は残りました。私達が口を揃えて残すことを願った谷津と斜面林が、必要最小限度の安全対策を施すことのみで残されることも決まりました。、、、」
・・・中臺由佳里氏は「ボランティアって何だろう イギリスで2つのプロジェクトに参加して」(第 52 号 1994 年 12 月)で問題提起をしています。曰く、「日本で使われている「ボランティア」という言葉の意味が、「したいからする」というよりは「慈善事業(チャリティー)」になってしまっているように思えます。、、、個人が犠牲をはらってまでするなんて、ボランティア本来の意味から離れてしまっているのではないかしら、と思うのです。「ボランティア」すなわち「暇な人がする施し」ではなくて、「普通な人が楽しみながらできる小さな公共事業」が本来の姿だと思うのです。」

＜1995 年＞

- 9 月 創立以来 12 年間事務局長(しおかぜ編集も)を続けた高野史郎氏が休眠宣言し、従来高野氏が担った業務を複数の人が分担する体制に変更。事務局は鈴木優子氏に。

＜1996 年＞

- 2 月 昭和の森連続観察会が 50 回目となる。テーマは、「冬景色 ……見てください、森や木、大地の素顔……」。担当指導員は、小牧利治氏(会長)と盛一昭代氏。

＜1997 年＞ 昭和の森の調整池計画が起こる

- 2 月 総会で、会長が小牧氏から高野史郎氏に、事務局長が和仁道大氏に。
- 4 月 三番瀬埋め立て計画の撤回を求め、三番瀬を守る署名ネットワークへの加盟を決定。
- 5 月 10 日 朝日新聞(千葉版)が、土地区画整理事業に伴い、宅地用雨水調整池が昭和の森にせり出して造られるとの計画があると報じた。1 週間後の協議会役員会で、昭和の森の自然を守る運動を協議会として進めることを決定し、5 月 22 日に高野会長らが千葉市役所を訪問し、千葉市長(松井旭氏)宛に要望書を提出、テレビや新聞でも取り上げられた。
- 6 月 16 日 昭和の森の開発計画の縦覧図書を見た上で、意見書を提出。
- 7 月 31 日 5 月に提出した要望書に対し千葉市長から回答文書が送られてきた。要望とは大きな隔たりのある回答だった。
- ・・・しおかぜ 68 号(8 月 20 日)で、「昭和の森問題のその後」と題して特集を掲載。
- 11 月 初のフォローアップ研修会を君津亀山で開催(1 泊 2 日)。NACS-J 指導員講習会を千葉県で隔年開催する一方、指導員講習会の無い年にフォローアップ研修会を開くこととした。
- 12 月 11 日 千葉市長宛に再度、昭和の森の開発計画に関する要望書を提出。

＜1998 年＞ 協議会の略称が「自然観察ちば」に

- 2 月 12 日 千葉市長から 12 月 11 日付要望書に対する回答文書が送られてきた。
- 7 月 会員からの応募を経て、協議会の略称が、「自然観察ちば」に決定。
- 7 月 昭和の森開発問題について関係団体と環境連絡協議会を設置、第 1 回目の会議を開催。

＜1999 年＞

- 2 月 総会で、高野会長が退任し、市川清忠氏が代表に。「会長」という呼称から、「代表」に変更(世話役との意味で)。事務局長は和仁道大氏が継続。

＜2000 年＞ 小学校学習支援ネットワークが始動。 昭和の森観察会が 100 回に。東葛しぜん観察会が発足。昭和の森で、カタクリとゲンジボタルの特別観察会が始まる。

- 4 月 河添寿子氏が中心となって、小学校の自然観察支援ネットワーク勉強会を開始。
- 4 月 昭和の森で初回のカタクリ特別観察会を開催。
- 4 月 昭和の森連続観察会 100 回目となる。テーマは「ウサギ追いしカタクリの里よ」。担当は盛一昭代、田島、二瓶、村杉久子の各氏。
- 6 月 昭和の森で初回のゲンジボタルの特別観察会を開催。
- 9 月 東葛しぜん観察会が発足。代表は田口信一郎氏。
- 11 月 協議会紹介のパンフレットを作成。渋谷孝子、佐藤晶子、田中玉枝、石嶋基次の各氏の協力による。



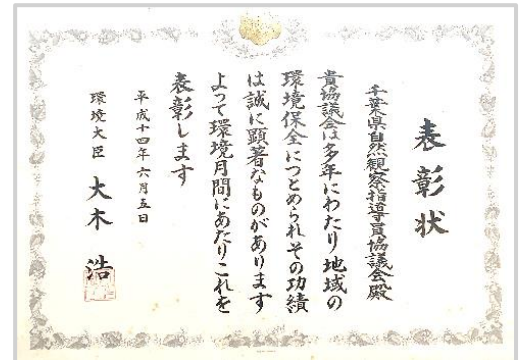
最近の SSN の模様

<2001 年>

- 2 月 総会で、事務局長が和仁道大氏から石嶋基次氏に。
- 4 月 千葉県知事に堂本暁子氏が当選し、9 月の県議会で三番瀬埋立て計画が白紙撤回された。・・・しおかぜ(11 月 1 日号)に、「三番瀬白紙撤回に思う」と題して和仁道大氏(当時副代表)が寄稿。「豊かな自然を残すことに努力するのは「子や孫のためのボランティア」だと私は確信している。」と。
- 9 月 昭和の森の調整池設置場所が確定したこと、ならびにカタクリ移植予定場所・移植方法について、石嶋基次氏がしおかぜ 92 号(2001 年 9 月 1 日)で報告。その後も随時、しおかぜの中で推移を報告する。

<2002 年> 自然観察ちばが環境大臣から表彰

- 6 月 協議会の長年にわたる地域の環境保全への貢献について、環境大臣から表彰される。



<2003 年> しおかぜが 100 号に(1~100 号合本作成)。ホームページを開設。創立 20 周年に。

- 1 月 しおかぜが 100 号となる。編集担当は山口正明氏。100 号までは B5 サイズだったが、101 号から A4 サイズに。ホームページが開設されたことが報告される。
- 3 月 昭和の森の調整池築堤工事が着工される。着工に先立ち、カタクリ等の貴重種植物が移植された。その後の移植状況や影響調査等について、しおかぜ 106 号(2004 年 1 月 1 日)で小西博典氏が報告。
- 9 月 しおかぜに、創立 20 周年特集を掲載。岩瀬徹、成田篤彦、眞田三朗、八木和主男、土屋喜久夫、小高正美の各氏が寄稿。
- 9 月 創立 20 周年記念講演会を開催。講師は溝口俊夫氏(NACS-J 講師、ふくしま鳥獣保護センター獣医師)。「これからの自然保護活動のために」がテーマ。
- 9 月 しおかぜの 1 号~100 号の合本を作成。
- 11 月 しおかぜに、小学校自然観察支援ネットワーク(当時は SSSN)の特集を掲載。各地(四街道、佐倉、東金、白井、船橋、千葉など)の小学校学習支援の模様を紹介。SSSN 勉強会が 20 回に。



昭和の森カタクリ移植地

<2005 年>

- 1 月 成田新高速鉄道線建設事業に係る環境影響評価準備書に対する意見書を、成田高速鉄道アクセス株式会社あてに提出。
- 2 月 代表が市川清忠氏から和仁道大氏へ、事務局長は引き続き石嶋基次氏。
- 5 月、6 月 フィールドミュージアム研修会を開催。5 月は市原・梅が瀬溪谷、6 月は一泊で清和県民の森で実施。

＜2006 年＞ 大草谷津田いきものの里の観察会が始まる

5 月 大草谷津田いきものの里が開園。秋から毎月 2 回、観察会が開催されることになり、自然観察ちばの観察ガイドを務めることとなる。10 月、第 1 回目の観察会が開催された。初回担当は太田慶子、小西博典、芳我めぐみの各氏。

＜2007 年＞

2 月 総会で、事務局長が石嶋基次氏から小西博典氏へ。

＜2008 年＞ 創立 25 周年記念イベント開催、昭和の森自然観察会が 200 回目に

7 月 自然観察ちば創立 25 周年を記念して、「尾瀬一泊研修会」を実施。担当は前田佳胤氏と小西博典氏。講師は、前田悦子氏と前田佳胤氏。9 月 6 日には、講演会（「自然観察あれこれ」浅間茂講師）と懇親パーティーを開催（京葉銀行文化プラザにて）。

8 月 昭和の森自然観察会が 200 回目を迎える。テーマは「クモと遊ぼう」担当は、和仁道大、佐藤一枝、田井中信子の各氏。



昭和の森親子田んぼ教室

＜2009 年＞

2 月 総会で、代表が和仁道大氏から小西博典氏に、事務局長が小西氏から赤木光明氏に。

5 月 東葛しぜん観察会の自然観察会が 50 回目となる。千葉ニュータウンで、タイトルは「春の里山とニュータウン」。担当は、坂巻真由美、林信子、岩根悦子の各氏。



2009 年総会の模様

＜2010 年＞ SSSN 勉強会が 50 回目に

12 月 SSSN 勉強会が 50 回目となる。千葉大学西千葉キャンパスで、テーマは「雨の日に室内で観察する手法を考える」講師は、栗山忠俊、盛一昭代、山田益弘の各氏。

＜2011 年＞ 東日本大震災が発生

2 月 総会で、事務局長が赤木光明氏から晝間初枝氏に。

5 月 しおかぜが 150 号に到達。編集人は高木純一氏。

・・・3 月 11 日に東日本大震災が発生。編集後記で、高木氏が仙台訪問時に仙台市長秘

書から被災した子どもたちの心のケアに役立つ自然観察の事例を尋ねられ、自然観察ちばの役員間の連携により、SSSN マニュアルがただちに送付され、気持ちが沈んでいる子どもたちのキャンプのプログラムに役立てたいと先方から返事があったことが紹介された。

…その後、宮城県名取市役所勤務の自然観察指導員(大久保氏)からの要請に応じて、多くの会員の協力により、被災地の子どもたち向けに自然関係の多くの絵本を寄贈した。…しおかぜ 153 号(11 月 1 日)に、伊藤道男氏が、しおかぜに「被災地を訪ねて」と題し寄稿、名取市の大久保氏ならびに名取市長に面会し、感謝の言葉があったことを紹介した。

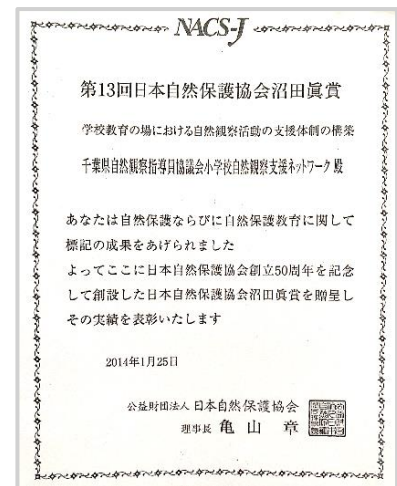
…福島事故の影響で千葉県では北西部9市が除染を国の費用で行う地域と指定され、SSSN の自然観察会では、「触らない、食べさせない(口に入れない)」にて対応することとした。

<2012 年>

5 月 しおかぜ 101 号(2003 年 3 月)～150 号(2011 年 5 月)を合本。

10 月 昭和の森自然観察会が 250 回目に。テーマは「昭和の森のキノコ」。担当は、坂本文雄、川北紀子、木嶋恵子の各氏。

<2014 年> SSSN が沼田真賞を受賞、東葛しぜん観察会の自然観察会が 100 回に



1 月 小学校自然観察支援ネットワーク(SSN)が、第 13 回 NACS-J 沼田真賞を受賞し授賞式と記念講演が東京清澄庭園で開催された。授賞式では、河添寿子氏が賞状と記念品を受け、記念講演は、佐口美智子、山田益弘、松川裕の各氏が務めた。2 月 11 日の自然観察ちばの総会でもこの記念講演を開催。

3 月 東葛しぜん観察会の自然観察会が 100 回目に。タイトルは「冬芽と木肌をみてみよう」。場所は香澄公園(習志野市)。担当は、米澤理雄、米澤裕子、龍門海行の各氏。

<2015 年>

2 月 総会で、代表が小西博典氏から晝間初枝氏に、事務局長が晝間氏から伊藤道男氏に。

<2016 年> 大草谷津田いきものの里の自然観察会が 10 年に到達、昭和の森自然観察会が 300 回目に

10 月 大草谷津田いきものの里の自然観察会が 10 年に到達。テーマは「バッタとカマキリ」で、担当は、岡田敬子氏と晝間初枝氏。



大草谷津田いきものの里

10 月 フォローアップ研修会が 10 回目となる。森林総合研究所から筑波山で(1泊2日)、講師は佐野由輝氏、田中ひとみ氏のほか、森林総合研所、つくば環境フォーラムの各氏。

12 月 昭和の森自然観察会が 300 回目に。テーマは、「里山のくらし、稲わらで正月飾りを作ろう」。担当は、木嶋恵子氏、須田聡恵氏。

<2018 年>

8 月 東葛しぜん観察会の自然観察会が 150 回目に。テーマは「江戸川土手で夕刻の自然を楽しむ(虫・コウモリ・星)」担当は、草野幸子、守永博夫、西河内ひとみの各氏、講師は渋谷孝氏。

<2019 年> しおかぜが 200 号に

9 月 しおかぜが 200 号に。編集人は勝股政雄氏。

<2020 年> 新型コロナウイルス感染症蔓延で半年間活動を停止、9 月から徐々に再開。

新型コロナウイルス感染症蔓延に伴い、2 月末の成田市自然観察会を初めに、自然観察ちば関与の各自然観察会がすべて中止となる。以降、8 月末までの半年間、一部例外を除き観察会活動は停止となった。

しおかぜについては、204 号から印刷、発送を外注にした。205 号(7 月 1 日)を休刊にした。役員会もオンライン会議に切り替えた(10 月から)。

9 月から、感染対策を実施した上で、自然観察会を順次再開した(昭和の森、大草谷津田いきものの里、稲毛公園、千葉市ふれあい)。東葛しぜん観察会は、研修観察会として再開した。SSN も徐々に再開した。

9 月 東葛しぜん観察会が発足から 20 周年を迎える。三嶋秀恒、渋谷孝子、小島紀彦の各氏たちが中心となり、20 周年記念誌(「自然とともに～20 年を振り返って」)を作成。

<2021 年>

2 月 昭和の森自然観察会が 350 回目となる。テーマは「冬の植物の過ごし方」。梅宮玲子、玉川弘幸、白波志帆の各氏。

3 月 総会を書面で実施した。

3 月 しおかぜ 151 号(2011 年 7 月)～200 号(2019 年 9 月)を合本。

10 月 NACS-J 指導員講習会が日帰り2日間で開催(千葉市動物公園)。

12 月 東葛しぜん観察会も研修観察会から一般向けの観察会に切り替え実施となる。



東葛しぜん観察会・江戸川

<2022 年>

2 月 総会をオンライン (ZOOM) で開催。代表が晝間初枝氏から伊藤道男氏に。事務局業務は、伊藤代表と山口正明副代表で分担。

<2023 年> 新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行、自然観察ちばが創立 40 周年

2 月 総会を千葉市生涯学習センターで開催。特別観察会は実施するも講演、懇親会は実施せず。事務局長が山口氏に。

5 月 新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行。

9 月 自然観察ちばが、創立 40 周年となる。

10 月 NACS-J 指導員講習会も、1 泊 2 日ベースに戻る。手賀の丘青少年自然の家で開催。

<2024 年> 創立 40 周年記念として講演会を開催、しおかぜ特集号 (別冊) を発行

2 月 総会と共に、記念講演、特別観察会、懇親会を実施。4 年ぶりのフルセット開催となる。

8 月 創立 40 周年記念講演会を開催。講師は宮下直氏 (東京大学・大学院農学生命科学研究科教授) で、講演テーマは「生物多様性と人の関係を問い直す」。



<編集後記>

一年遅れとなりましたが、創立40周年記念ということで、一つは8月末の記念講演、もう一つがこのしおかぜ別冊号です。今回、代表と一部会員の方に文章を寄せていただきました。それぞれの想いが伝わってきて、多謝です。「創立40周年の主なできごと」は、「しおかぜ」の創刊号から直近号までを括って選びました。「なぜあれを書かないのか。」とのお叱りの声もあるかもしれません。編集人の力量不足ということでご容赦ください。

「しおかぜ」を繰り返しながら感じたことが二つあります。一つは、「しおかぜ」ってあらためてスゴイ財産だなということ。40年間のできごとが網羅されている上に、それぞれの濃い中身が生き生きと書かれている。今、新しく考えたと思ったこともすでに誰かが過去やっていたり考えたりしたことが多い。二つ目は、かつて「しおかぜ」では自然観察や自然保護活動について色々な意見が交わされていたということ。それらを読みだすと作業が中々進まず困りましたが、当時の問題意識や熱気が伝わってきました。

現在、「しおかぜ」の掲載記事は、行事報告が中心になっています。もちろんそれはとても重要ですが、加えて、もっと自由な意見交換が「しおかぜ」の中にあってもよいのでは、と感じました。

(事務局 山口正明)